

ルシャ地区は、サケマスが自然産卵する川が3本も集中しており、野生動物も豊富で、世界遺産知床の核心地域です。特にヒグマは稀に見る高密度で生息しており、現地で漁業を営む漁業者との間に驚くべき共存状態が実現されていることも、報道などでよく知られています。

一方、人とヒグマの不用意な出会いは、危険を招くことも事実です。ルシャ地区から山越えた半島の東側には羅臼町の住民の生活圏があり、南下すれば多くの人々が訪れる観光地やウト口の住宅地があります。世界遺産の地で、彼らの自然な生活を保全し、かつ、人々の安全を守るという課題解決のためには、この地のヒグマの生活ついて基本的なナゾを明らかにしていくことが必要です。

私たちは、直接観察や標識付け調査、ヒグマの毛や筋肉組織を取ってDNAを調べる最新の手法を駆使して、以下のようなことを調べています。

●どのくらいのクマがいるの？、どのように生まれているの？

何歳から繁殖を始め、どんな頻度で何頭の子を産んでいるの？ 誰が誰の子どもなの？ 彼らの血縁関係はどうなっているの？

●どこを動き回っているの？子グマはどこへ？

このクマたちが、人の生活圏まで行っていることはないのか？ 子グマはどこに行っているの？ 彼らの動きに血縁関係などヒグマ社会の構造が影響しているのか？

## 何頭のクマがすんでいるの？

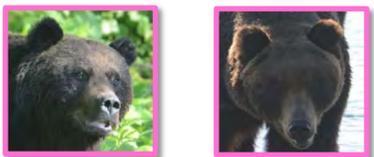
### 常連メンバー (○:♀成獣、□:♂成獣)



クサビ リンダ ワッキー キリコ ハッチ DC



BE ドラム リッチ ワッキモ



イケメン マサミ

よく聞かれる質問ですが、何頭が住んでいるかははっきり言うのは難しいことです。

いつもいるお馴染みの面々は、ここの住人と考えて良いでしょう。しかし、たまに確認できるクマは、住んではいるけど人目に付かない森を主に住処としているのか、あるいは、別な場所に住んでいて、ときどき来ているだけなのか、まだはっきりしません。

流れ者と思われるオスグマたちは、メスが発情する季節だけ、殴り込み(?)に来ているようです。他にまだ居場所が定まっていない子グマや若グマもいます。

大まかには、メスを中心に親グマは常連さんが10頭前後いて、その他、ときどき来るクマも含めると、40頭前後がここで見られるといえるでしょう。

### マイナーメンバー

- ① 海岸線に時々現れるクマたち
- ② 森の中から出て来ないクマたち
- ③ 繁殖の時期に現れる流れ者のオスたち
- ④ その他、居場所がまだ定まっていない子グマや若グマ

# ルシヤ地区でよく見られるヒグマたちを紹介します！

彼女らは外見が特徴的で、よく見ることができるクマたちです。



**DC** (20歳以上) ♀  
胸元に小さな二つの白斑。ゴツゴツした顔立ち。キリコの母親。



**キリコ** (15歳以上) ♀  
ハッチの母親。左胸に小さな白斑。鼻に黒い縦すじあり。



**ハッチ** (6歳) ♀  
気の強いお姉さん。幅広のツキノワが首の後ろまで回っている。



**BE** ♀ ルシヤで最強のメス。ツキノワはない。鼻面が白っぽく、耳が大きい。



**ワッキモ** ♀  
太めで白っぽい鼻面。ぎょろ目。真ん中で別れたように見えるエプロン状のツキノワ。



**リンダ** (15歳以上) ♀  
頭から首、のどはきれいな明るい金毛。わきの下から体側にかけて茶色い毛



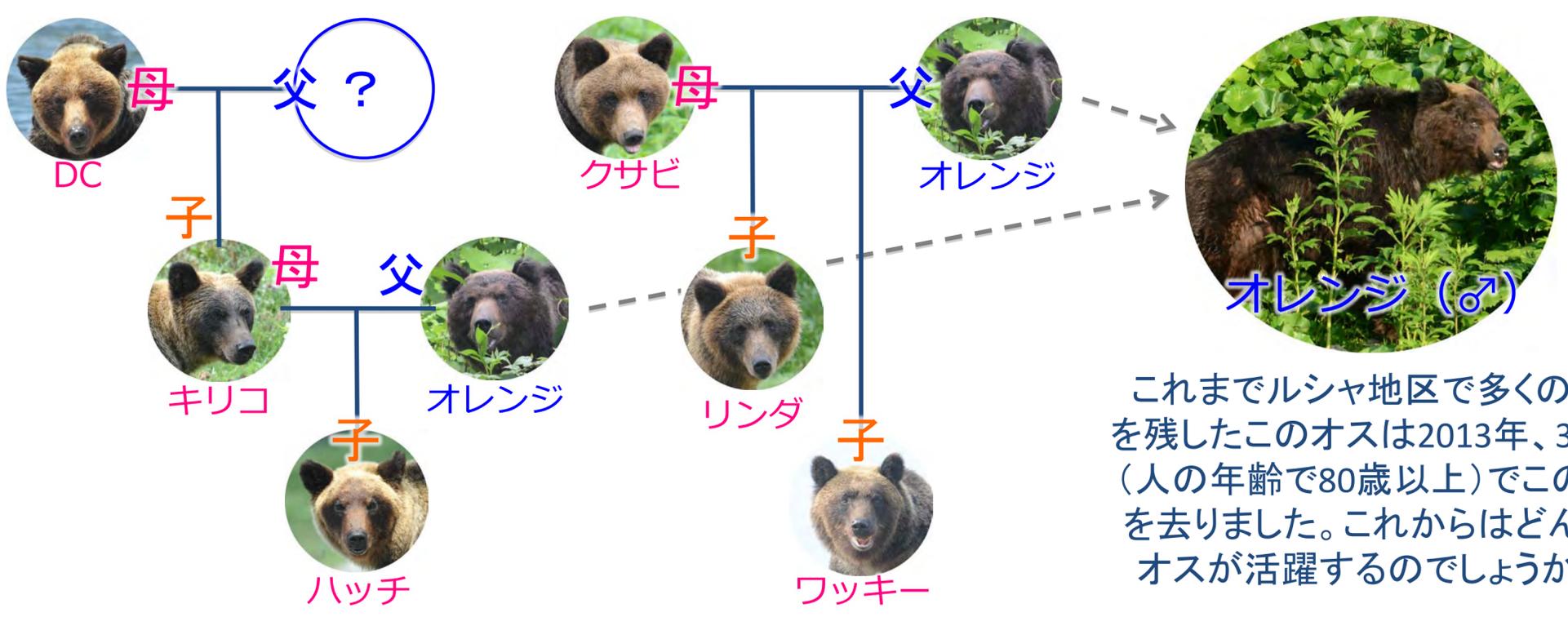
**ワッキー** (10歳以上) ♀  
額の黒っぽいつむじが特徴。ツキノワは幅広いエプロン状。



**リッチ** ♀  
真ん中で別れて、右側が大きいツキノワが特徴。

## クマたちの家族関係をのぞいてみよう～DNA分析～

遺伝子を調べることで、日本で初めてクマたちの家族関係が明らかになってきました。ルシヤ地区には、大きな2つの家系があることがわかりました。



これまでルシヤ地区で多くの子を残したこのオスは2013年、34歳(人の年齢で80歳以上)でこの世を去りました。これからはどんなオスが活躍するのでしょうか。

DNA分析は、北海道大学獣医学部野生動物学教室によって行われました。